

発刊に際して2

総特集：現代北米アナキズムの二潮流

■マレイ・ブクチン

アナキストの廃業 森川真人	4
社会的アナキズムかライフスタイル＝アナキズムか	10
自治体化——経済の地域社会所有	76

■ボブ・ブラック

マレイ・ブクチンとボブ・ブラック 飛鳥了	84
労働廃絶論	91
アナキー・アフター・レフティズム	114
国家はウソだらけ……世の中ウソばかり	124
私のアナキズム問題	129
麻薬戦争は国家の健康法	136

Anti-Globalization

反資本主義者の抵抗運動

—反グローバリゼーションにおけるアナキスト運動論のために— noiz149

■反グローバリズム街頭行動フォト・クロニクル

ブラックブロック活動家の声明(ジェノバ)	166
ジェノバG8抗議で何が起きたか?	167
フオ・クロニクル(ジェノバ)	171
ACMEコレクティブによるシアトル11月30日のブラックブロック声明	174
フオ・クロニクル(シアトル)	181

切断と連結 —東アジア反日武装戦線について— 松本 勲188



「真に重大な哲学上の問題はひとつしかない。自殺ということだ。人生が生きているに値するか否かを判断するこれが哲学の根本問題に答えることなのである。」（『シーシポスの神話 アルベルト・カミュ』） さればアナキズムとは我々にとって何なのであろうか？ 先のカミュの哲学的問いに引き付けて言えば「人生とは生きるに値するものである。しかしさらに言えば、よりよく生きなければならぬ」。そしてアナキズムとは、このような熱烈な「生の賛歌」を基底にした社会変革の理念とでも呼べるのかもしれない。十九世紀において、社会構造、人間の社会的諸関係そのものの変革を企図するまさに革命思想として花開いたアナキズムは、その後アナキズム運動内に様々な潮流を生んだ。それ以降は運動論や組織論、果ては人間社会に対する認識の仕方等々の差違や位相の違いから、良くも悪くも「思想としてのアナキズム」が内包する多様性に対する寛容さを損なわせ、「自由 平等 友愛」という理念に対する忠実さを競うことが、変転してセクト間の争いへと転化していった歴史であるとも言える。アナル・サンジカリズム、アナキスト・コミューン、ソーシャル・エノロジー的アナキズム、プリミティブイズムのアナキズム etc。それでは我々はこのようなバラバラの形容詞付きの「アナキズム」を形容詞なしの「アナキズム」に統合することを目指して雑誌を発刊しようというのか。否、そんなことはどうでもよいことであるし、不可能なことである。そもそも我々は出自、社会的階級あるいは階層、さらに言えばアナキズムの捉え方に関しても何一つ共通するものではなく、「思想サークル」の体裁さえ整っていない。その意味で誌名を「アナキズム」と付けたのは不適切かもしれないが、我々を取巻く諸権力の解体を従来の古典的枠組みからはみだすような形で追求する試みが必要であるというのが我々の共通認識であり、また唯一の共通テーマでもある。そしてそれはどのような形であれ社会に「ミット」し変革の方途を模索したいという希求が皆にあるということでもある。最後に、何よりもこの雑誌を手にとった貴方がたには、一読者という立場ではなく、新たな社会的潮流を創っていくという我々の企図の同伴者となってもらいたいと切に願う。

『アナキズム』誌編集委員会

総特集
現代北米アナキズムの二潮流
マレイ・ブクチンとボブ・ブラック



ブクチンとブラックの論争は一九九〇年代に入ってから始められた。当初われわれは、個々人の翻訳作業の成果を雑誌に掲載することで、この論争の意味を明確にしようと考えた。だが、「論争」は意外にもあるまじき焦点を巡ってなされているものではなく、たゞむしろ双方の語る言語の当否よりも「スタンス」の決定的違いが、さまざまな領域で炸裂しており、それゆえ却って拡散している感もある。

しかしこの「論争」らしきものの背後には、明らかに時代的な要請に基づいた主体に関する重要な諸問題が随所にちりばめられている。そう私たちは確信する。

そこで本号においては、ブクチンとブラックの各論文を第一次資料として並列的に掲載することにした。両者の基本的な紹介以上の突っ込んだ論文の掲載は次号以降になるだろう。

アナキストの廃業

森川 莫人



本誌にはマレイ・ブクチンの「社会的アナキズムか、ライフスタイル・アナキズムか」と「自治体化…経済の地域社会所有」が収められている。前者は現代のアナキズム諸傾向に対する批判論文であり、後者はブクチンが推し進めている民衆運動、リバータリアン自治体連合論の経済的側面を示した論文である。

ブクチンの思想は広範に渡り、生態系諸問題・哲学・政治運動・理想社会像・民衆革命史などについて数多くの著作を書いている。その著作には、必ず、ヒエラルキーに対する断固たる反対・権力分散型の連合主義・直接行動の最高形態としての直接民主主義・啓蒙主義の伝統を継承した弁証法的自然主義と人道主義が現れている。そう、マレイ・ブクチンは、強力なまでにアナキストだったのだ。だが、それは過去形だ。

私事で恐縮だが、僕は二〇〇一年の夏に行われた「アナキズムの伝統を更新する」という会合に参加しようと思いついたとき、ジャネット・ピールにメールを送り、ピールとブクチンも参加するのかわか尋ねてみた。その返事は次の通りだった。

『ここ数年、ブクチンと私はアナキズムから次第に遠ざかっていると感じています。ご存知の

通り、ブクチンが自分の見解を「アナキスト」として示し始めたのは、約40年前のことです。当時、アナキストはほとんどおらず、アナキズムは急進主義イデオロギーとしてはほとんど忘れ去れていました。ブクチンは、自分がアナキズムを「更新」（現代的表現を使えばですが）できればいいと望んでいたのです。それは、アナキズムに、生態学的見解だけでなく、その著作で継続していたように、社会発展の理論・進歩した弁証法哲学・結局のところ、理性的で体系的で一貫性があり、社会主義全般の中で最良の部分に全く基づいたりリバータリアン民主主義政治運動を持つて「更新」できればいいと思っていたのです。

ブクチンは、現在、この努力は失敗したと信じています。私達が出会うアナキストの大部分は、ライフスタイルや文化的な問題か、食品協同組合などのようなコミュニティアン制度にかかずらっています。アナキスト哲学は、現在そうあるように、ブクチンが示している思想よりも、ポストモダニズム・実証主義・非歴史主義・反理性主義・ディープリエコロジーでさえもを好んでいるのです。ブクチンは、この軌跡は、アナキズムの根本的傾向なのであり、今日のアナキストがその傾向の中で自身の願望を満足させるようにはっておくべきだ、と結論付けています。

でも、私達は、「アナキズム」は、自分達の活動を適切に示した言葉でもなければ、正しく示した言葉でさえもないと思っています。その代わり、私達が関心を持っているのは、アナキズムとマルクス主義双方を超越することであり、コミュニアリズムを望ましいと思うているのです。

こうした状況なので、あなたがブクチンの著作を「アナキズム」と言う名の雑誌に掲載することは——全くのあなたの選択です。もちろん、私達は「アナキズムの伝統を更新する」と呼ばれる会合にはいかなるものであれ参加するつもりはありません。（ジャネット・ピール、私信、二〇〇一年）

実際、僕が翻訳している社会生態学プロジェクトの論文や現在入手可能な唯一の邦訳書「エ



社会的アナキズムかライフスタイル？アナキズムか

——掛け橋不可能な亀裂——

ここ二世紀で、アナキズム——非常に普遍的な反権威主義的考え方の一群——は二つの根本的に相反する傾向間に緊張をはらみながら発展してきた。二つの傾向とは、個々人の「自律」に対する私事本位主義的コミットメントと社会的「自由」に対する集産主義的コミットメントである。これらの傾向がリバータリアン思想史の中で調和したことなど一度もなかった。事実、前世紀の大部分では、これらの傾向はアナキズムの中に単に共存していただけだったのだ。その共存の仕方、その場に造りだされるべき新たな社会を明確に述べたマキシマリスト的信条表明ではなく、国家に対する反対というミニマリスト的信条表明に過ぎなかったのである。

個別に見ればさまざまな違いが明確にありはしても、言うまでもなく、アナキズム諸派は特定形態の社会組織を擁護していなかった。しかし、基本的にアナキズム全体として提起していたのは、アイザイア・バーリンが「ネガティブ・フリーダム」と呼んだ、形式的な「〜からの自由」であって、本質的な「〜への自由」ではなかったのだ。事実、アナキズムはその多元論、イデオロギ―上の寛容性、創造性、さらにはある近代ポストモダニスト信奉者が論じたように、論理の支離滅裂性さえもその現れだとして、ネガティブ・フリーダムに対するコミットメントを賛美していたものであった。

アナキズムがこの緊張を解決できず、個人の集産集団

に対する関係をはっきりと述べることができず、無国家無強権社会を可能ならしめる歴史的背景を明言できなかったことが、アナキスト思想の中で今日まで解決されていない諸問題を生み出したのだ。ピエール・ヨセフ・ブルードンは、当時の多くのアナキストよりも、リバータリアン社会の充分な具体像を描き出そうとしていた。基本的に小規模生産者・消費者協同組合・共同体間の契約に基づいたブルードンのヴィジョンは彼の生まれた地方職人世界の芳香を漂わせるものであった。しかし、「patronist」を混合した彼の試みは、契約的社会構造を持った、リバティという族長主義的概念となることが多く、深みを欠いていた。ブルードンの職人・協同組合・共同体は、職人が持つ個人的自律への偏向を映し出しており、能力と欲望といった共産主義の言葉よりも、平等や正義といったブルジョアの契約用語にそれぞれが関連しており、集産集団に対するいかなる道德的責任もその成員の良心程度にしか定義していなかったのだ。

確かに、ブルードンの有名な宣言である、『私を支配しようとする手を差し出す人は誰であれ強奪者か暴君だ。宣言しよう、奴は敵である。』は、個人主義的なネガティブ・フリーダムに強く偏向しており、抑圧的な社会制度

に対するブルードンの反対と彼が意図していたアナキスト社会のヴィジョンとを覆い隠してしまっている。彼の言明は、ウィリアム・ゴドウィンの明快な個人主義宣言、『私が心の底から服従できる唯一の力とは、私自身の理解による意思決定、私自身の良心の命令しかない。』、と簡単にブレンドできる。ゴドウィンの自分自身の理解と良心という「権威」に対する宣言は、ブルードンが「自分の」リバティを制限する恐れのある「手」を非難したように、アナキズムに巨大な個人主義的推進力を与えたのだった。

このような宣言は人をつき動かす力を持っているのであろう。北米合州国において、これらの宣言は、その「自由な」事業の是認とともに、いわゆるリバータリアン（もつと正確に言えば、有産主義者）右翼から絶大な賛美を勝ち取ることとなり、アナキズムがそれ自体で全く一貫性のないものだと明らかにされたのである。逆に、ミハイール・バクーニンとピョートル・クロポトキンが基本的に集産主義的見解を持っていた。クロポトキンの場合、明らかにそれは共産主義のものであった。バクーニンは個人よりも社会を強く優先していた。彼によれば、社会は、『全ての人間個々人より先にあり、同時にすべ



自治体化——経済の地域社会所有

拙著「リバータリアン自治体連合論に向けて」(『Our Generation』(Vol. 16, Nos. 3-4, Spring-Summer 1985, pp.9-22)に掲載)で、私は、現在優勢な文化に対するいかなる対抗文化も、優勢な諸制度に対する対抗制度と共に発達しなければならないという観点を提起した。その対抗制度とは、中央集権型官僚制度的国民国家に現在奪われている社会生活・政治生活の制御力を奪い返す権力分散型連合的民衆権力である。

19世紀の大部分と20世紀のほぼ半分を通じて、最も急進的なイデオロギーは、この民衆権力の伝統的中心地を、賃労働と資本との衝突の場、工場に置いていた。工場が「権力問題」(power question)の所在地であるという考えは、当時の急進主義の言葉を使えば、産業労働者階級はラジカルな社会変革の「覇権的」行為者であり、自身

の「階級利益」によって「つき動かされ」、一般的には武装蜂起と革命的ゼネストによって、資本主義を「転覆させる」という信念に基づいていたのだ。そして、労働者自身の社会行政システム——それが「労働者の国家」(マルクス主義)であれ、工場委員会の連合(アナルコサンジカリズム)であれ——を確立するだろうというのだ。

ふりかえってみれば、現在では、1936年(1939年のスペイン市民戦争は、革命的装いの欧州労働者階級による、このモデルに従った最後の歴史的活動だったと考えられる(原註。(この原稿を書いている月でほぼ)50年が経過しているが、1930年代後半の偉大なる革命の波は、プロレタリア社会主義とアナキズムの時代の絶頂であっただけでなく、その終焉だったことは明らか

だ。歴史上初の労働者蜂起にまで、つまり、フランスの首都において赤旗の下にバリケードが築かれた1848年6月のパリ職人と労働者の蜂起にまで遡る時代の絶頂であり終焉だったのだ。その後の歳月、特に1930年代以降、プロレタリア革命という伝統的モデルを繰り返そうとする僅かばかりの試み(ハンガリー・チェコスロバキア・東ドイツ・ポーランド)は失敗しただけだった。事実、これらは歴史の中に消えうせた偉大なる大義・理想・努力の悲劇的模倣だったのである。

(原注：50年を経た上でスペイン市民戦争を模倣したものに付いては、拙著「西班牙アナキズムについて」、『Our Generation』(1986)と「スペイン市民戦争：五十年を経て」、『New Politics』(Vol. 1, No. 1, New Series, Spring, 1986；現在はAK Pressより出版されている。を参照して頂きたい。スペイン市民戦争のバックグラウンドについては、拙著「スペインのアナキスト：英雄的歳月」を参照して頂きたい。(2001年現在では、AK Pressより出版されている。))

第三世界における農民暴動運動は別としても、独断的セクト主義者以外は、1848年6月・1871年のパリコミューン・1917年のロシア革命・1936年のスペイン革命をまじめに「モデル」として取り上げる人などいまい——こうした革命を引き起こしたタイプの

労働者階級は科学技術の変化と社会の変化によってほぼ完全に武装解除され、また、こうした革命に僅かばかりの力を与えて来た造兵術とバリケードは、近代国民国家が自由にできる莫大な軍備の前には単なる象徴でしかないからだ。

だが、長い間欧米急進主義の一部だったもう一つの伝統がある。リバータリアン自治体連合政治運動の発達である。街・隣近所・都市・市民集会を中心として構築され、地域的・地方的・究極的には大陸的ネットワークへと自由に連合する新しい政治運動だ。この「モデル」は、特に、ブルードン・バクニン・クロポトキンによって一世紀以上に推し進められたもので、単なるイデオロギー的伝統以上のものなのである。この伝統は、16世紀のスペインでComunerosによって、1770年代にニューイングランドからチャールストンへと広がった米國タウンミーティング運動によって、1790年代初頭にパリの各行政地区市民集会によって、本物の民衆実践として繰り返して浮上しており、1871年のパリコミューンから1960年代と1970年代初頭のマドリッド市民運動(Madrid Citizens' Movement)まで続いていたのだ。リバータリアン自治体連合論は下からの運動——プロ



マレイ・ブクチンとポップ・ブラック

——現代アメリカ・アナキズムの2つの傾向——

飛鳥 了

今年も残り僅か、三十歳過ぎてからというもののやけに時間の経過が早く感じられる。四十代、五十代となると、ますます日々あつという間に過ぎ去っていくのであろうか。などと感傷に浸っている暇もないほど衝撃的な事件が、九月十一日にアメリカ・ニューヨークで起こった。この一件で七月のジェノバ・サミットにおいて大々的に展開された反グローバリズム運動の熱気、余韻が吹き飛んでしまった。だが、これら一連の出来事は全く関連性がないものではなく、敢えて言えば新自由主義とかグロ

ーバリズムとか呼称される「世界新秩序」形成に向けて突っ走るアメリカ・EU諸国、日本などを中心とする先進資本主義国の野望に対する、様々な傾向、指向性、想念を含んだ、まつろわぬ者たちのマグマの噴出といってもよいであろう。一方これに対峙する先の政府中枢の権力権領者たちは、既にこれらを同根の病巣を有する双生児として認識し、今後激しい弾圧を仕掛けてくるであろう。また「反グローバリズム」とはいつても、厳密に言えばそこには様々な立場、主張、目標があるのであって、

一括りにしてしまうのは誤りかもしれない。同一の攻撃対象を共有しているという点だけが共通項であるともいえる。それでは、それらのうねりのなかに存在する、アメリカ・アナキズム村在住の住人たちの中の代表的な傾向を思想的レベルで表現している二人の思想家について簡単に紹介しよう。

マレイ・ブクチン 米国の思想家。1921年ロシア系移民の子としてニューヨークに生まれる。労働者出身の知識人であり、ソーシャル・エコロジーの創始者として世界的に評価が高い。62年の『われわれの合成的な環境』はレイチェル・カーソンの『沈黙の春』にほぼ半年先駆けての出版であった。

（『エコロジーと社会』藤堂麻理子・戸田清・萩原なつ子「訳」、白水社より抜粋）

ブクチンが提唱するソーシャル・エコロジーという考え方は、彼独自の自然哲学と社会哲学に基づいて理論構築されたものである。それではその中味とはどのようなものだろうか。ブクチン思想の概要を上手く纏めである前掲書の訳者あとがきから引用させてもらおう。

彼の自然哲学は「弁証法的自然主義」と呼ばれる。ヘーゲルやマルクス、フランクフルト学派（ホルクハイマー、アドルノ等）などを批判的に摂取しながら、人類史を含む自然史を自由・合理性・多様性・連帯の増大としてとらえるものである。ブクチンの社会哲学においては、政治・経済・文化に通底するヒエラルキーに対する批判と、決定論的歴史観の批判が重要である。長老―若者、聖職者・専門家―素人、男―女、資本家―労働者、国家（政治家・官僚）―民衆、マルクス主義やフェミニズムは往々にして特定のヒエラルキー（階級やジェンダー）のみを重点的にとりあげ、他をそれに還元することになりがちであるが、そうした見方は狭いとされる。また、本書に見られるように、決定的歴史観を排して、「歴史の分岐点」においてありえた（ありうる）選択肢を強調する。

ブクチンは、以上のような自然哲学と社会哲学に基づいて、さらに実践編として「リバータリアン自治体連合論」を掲げて政治領域での直接民主主義的理念の拡張及び浸透、そしてその実現を目指している。また、彼の社

会哲学を見て分かるように、階級闘争中心主義（プロレタリアイト中心主義）は否定され、従来の社会主義が標榜し、現に採用されたような経済領域における「国有化」はもとより、アナルコサンジカリズムのような労働組合による生産の管理も否定されている。その代わりに「経済の自治体化」、「地域社会による経済管理」が主張されている。元マルクス主義者だからなのか、それとも彼の特性なのか良く分からないが、彼の思想的特徴をさっと並べただけでもひとつの小宇宙とでも呼んでもよいような確固たる世界観を構成している。これだけの豪華料理を並べられれば、大抵の人は圧倒されて「いただきます。」と素直に箸を付けるであろうが、世の中にはジャンクフードの方が好きな人もいる。そこまではなくても、「毎日懷石料理やフランス料理のフルコースなんか喰えるか。納豆でメシ、これが一番。」という人は多いはずだ。そのような心意気でもってブクチンに対しても罵詈雑言を浴びせ、彼の「権威主義的」言辭や運動論に対して牙を剥いた男がいた。その代表格がボブ・ブラックその人である。

ボブ・ブラックについての詳しい経歴等のデータはない。というよりも一応あることはあるのだが、信用する

Bob
Black

労働廃絶論

人は皆、労働をやめるべきである。

労働こそが、この世のほとんど全ての不幸の源泉なのである。この世の悪と呼べるものはほとんど全てが、労働、あるいは労働を前提として作られた世界に住むことから発生するのだ。苦しみを終わらせなければ、我々は労働をやめなければならない。

それは、「何もするな」という意味ではない。

私は「遊び(play)」（１）に基づいた、新しい生き方を主張しているのだ。言い替えれば、私は「遊び(Tudic)」革命（２）を主張しているのである。

「遊び」という言葉に、お祭(festivity)、創造力

にたるプロフィールは入手できないといった方が正確かもしれない。それでも、彼の「正統的な」政治論文やそれ以上に数多く発表されている毒の効いた小気味よいエッセイ群の内容から推察するに、シチュアシヨニスト（状況主義者）の影響が色濃いこと、従来の労働者中心主義的な運動形態に批判的なこと、などははっきりしている。また先にふれたように、彼は徹底した反権威主義者であり、アナキズム運動内部におけるアナキスト達に対しても手加減はしない。その結果トラブルが多い男としても有名らしい。本誌のメイン特集で掲載されているマレイ・ブクチン『社会的アナキズムからライフスタイル・アナキズムへ』の発表を皮切りに、ブラックのブクチン批判は執拗にかつ徹底的に行われた（但し、ブクチン先生は殆ど無視）。この「論争？」自体にはここではふれずに、ブラックの代表作『労働廃絶論』について少し書いてみることにする。

この論文は1985年に発表された。インターネット・ウェブサイト「アナキーいんにつぼん」の「アナキズム図書室」に日本語訳が載っているのので、ここから引用させてもらおう。

マルクス主義者は官僚がボスになるべきであると考え

(creativity)・友好的宴会気分(conviviality)・共生(commensality)といった意味を私はこめている。できればアイトもそこに入りたい。そこには、「子供の遊び」よりもずっと多くの意味があるのだ。

私は、皆と喜びを分かち合うことの中に共同の冒険があることを主張したい。自由な相互依存関係がお互いを豊かにすることを主張したのである。

「遊び」は受動的ではない。

収入や仕事のことなどすっかり忘れて、まったく無精と怠惰になる時間を、誰もが今よりもっと必要としていることはまちがいない。雇用によって引き起こされる極

度の疲労から回復すれば、誰だって行動したくなるものなのだ。

オブローモフ主義(3)とスタハノフ主義(4)は、けつきよく悪貨の裏表にすぎないのである。

「遊び(Judic)」生活は、今の現実とは全く相いれない。「現実」はまったくタチが悪い。それは、人生を単なる生存以上のものにしようとする我々の活力を、全て吸いとってしまうブラックホールのようなものだ。

不思議なことに、不思議ではないかもしれないが、全ての古いイデオロギーが保守的である。なぜなら、古いイデオロギーはたいいてい「労働」を信仰の対象にしているからだ。

中には、マルクス主義や大半のアナキズムのように、ほかに信じられるものがないので、一層頑なに労働を信仰するものさえある。

リベラル派は、雇用差別を終わらせるべきであると言う。私は、雇用を終わらせるべきであると言いたい。

保守派は労働の権利を主張する。カール・マルクスの義理の息子で気まぐれなポール・ラファルグ(5)に習

って言えば、私は怠ける権利を主張する。

左翼は完全雇用がよろしいと考える。シュールレアリストを真似て言う、――私はふざけているわけではない――私は完全失業がよろしいと考える。

トロツキストは永久革命を目指して闘う。

私は永久のばか騒ぎ(revelry)を目指して闘う。

けれども、すべてのイデオログが(今そうしているように)労働を主張するにしても、なぜか、彼らはそれをハッキリ言おうとはしないのである。それは、彼らが他人を自分のために労働させようとしているという理由からだけではではない。

彼らは賃金、時間、労働条件、搾取、生産性、収益性についてなら、とめどなく話し続けるし、労働それ自体に関してでなければ、喜んで何でも話すであろう。

我々のために思想を提供してやろうというこれらの専門家連中が、私たち自身の人生の核心である労働に関して、結論が一致することはまずない。連中同士で、重箱の隅をつつくコジツク議論をするだけである。労働組合も経営者も「労働者は生きるために人生の時間を売らなければならぬ」ということについては一致しているの

だ。言い争うのはその価格についてにすぎない。

マルクス主義者は官僚がボスになるべきであると考え。リベタリアンは実業家がボスになるべきだと考える。フェミニストは、ボスが女性でありさえすれば、どちらだろうとお構いなしだ。こうしたイデオロギー屋の違いは、権力のもたらす利権をどうやって分配するかという点につくことは明らかである。誰も権力自体に対しては疑問を持たないし、彼ら全員が、我々に労働を続けさせようと考えていることも、同じようにまた明白であらう。

あなたは私がふざけているのか、真剣なのか、どちらなのかと思ひ迷うかもしれない。私はふざけていると同時に、真剣でもある。

「遊ぶ(Judic)」ことは、ばかばかしいことではないのである。「遊び」がくだらないとは限らない。くだらないことが常につまらないわけではないし、私たちは真剣に、くだらないことをするべきときも少なくない。

私は、人生がゲームであるという考えが好きだ。それも大博打のゲームだ。私は「遊び」も真剣勝負でありたいと思っているのだ。

労働のオルタナティブは、何もしないことではない。

「遊ぶ(Judic)」ことは「ただ遊ぶ(qualudic)」ことではない。私が「無気力の喜びを大事にする」と言うとき、それが他の喜びや娯楽を中断すること以上に価値があるというわけではない。

また、私は「レジャー」と呼ばれる、時間制限のある管理された安全弁を奨励しているわけでもない。全く違う。レジャーは労働から回復するために、仕事を忘れようと熱狂的であるが無駄な努力をして過ごす時間である。多くの人はすっかり疲れきって休暇からもどりと、ゆっくり休息がとれるように労働に戻ることを心待ちにするくらいである。労働とレジャーの主な相違は、労働中には少なくとも、疎外と消耗に対して対価が支払われるということだけなのである。

私は言葉の定義ゲームをするつもりはない。

私が「労働の廃絶を望む」と言うときは、言葉通りの意味なのである。

けれども、私が使う言葉をこくあたりまえに定義すれば、私が言わんとすることが一層ハッキリするだろう。労働の私の最小限の定義は「強制された仕事」、すな



アナキー・アフター・レフティズム

ここに訳出したのは、マレイ・ブクチン『社会的アナキズムからライフスタイルへアナキズムへ』(AK Press 1996) に対する反駁の書『Anarchy after Leftism』(CAL Press 1997) の最終章である。テキストには、ブラック自身のウェブページに掲載されていた編集版を使用した。

一点についていえば、マレイ・ブクチンは、唯一のことで正確である。つまり、「アナキストは転換点にある」ということだ。いま、史上初めて、アナキストは唯一の革命的な潮流となった。たしかに、すべてのアナキストが、革命的であるというわけではない。しかし、アナキストの名においてではなく、革命的であることはもはや不可能だろう。

ひとつの自覚的な潮流として、アナキズムは常に左翼

一般、とくにマルクス主義の影となり、影をさされる存在に終始してきた。とりわけ、ソ連の形成以降、アナキズムは現実的に(それゆえ、非現実的に)マルクス主義との関係のうえに自身の存在を狭めることになってしまった。共産主義者の一衛星という存在への縮小。革命下における、そうした縮小は偶然的出来事などではなく、現代史におけるあるパターン化された特徴である。そして、マルクス主義という巨大なライバルによる呪縛。アナキストは、マルクス主義者の左翼用語で争い、そして

いつも負けつづけてきた。

マルクス主義は、ユーロ・コミュニズムが崩壊した頃にはすでに破産していた。イデオロギーとしてのマルクス主義は、現在、大学キャンパス内のほとんど大学教授界限での現象にすぎない。そしてそれらの固執者の大部分は、フェミニズムと民族的ナショナリズムに寄生している。マルクス主義の国家制としての残存は、東洋的専制国家(西洋の型としては考えられないそれ)を数えるだけになった。七〇年もの間通用してきたアナキストの「抗弁」は、突如として調子外れのものになってしまったのだ。

こうした情勢の変化は、誰をも驚かせた。それはまた、アナキストにとっても同じだった。変化への対応を準備するためには、さらに二〇年を要したのである。その結果——それが計画的ではないというのならば、成りゆきと怠惰とによって——彼らの多くが社会主義の最左翼という従来の位置からはなれることになった——その右翼へ移ることによってではなく。それは、大多数の北米人と同様に、彼らは、どちらか一方への選択をしいられた

とき、左翼と右翼の重要な違いを見分けることができなかったからだ。その後、彼らは概して大学で得た左翼の虚飾、あるいは汚点を脱ぎ捨て、固有の反権威主義をあらわしはじめたのである。キャンパスで遭遇したマルクス主義者は、ライバルとして、または関わりあるものとみなしてまともに相手にするには、あまりに珍妙な代物だった(教授たちは、そんな奴らをさらにおかしなものにした)。そして以前にもまして、ある部分のアナキストたちは、自分たちを日常生活の経験のなかで政治と接触する「個人」であることを主張し、日常生活批判を最初の原則とするシチュアシオニストのような理論家たちに呼応するようになった。彼らは、かつて流行にのってたくわえた教義と教養の処分に、大型廃棄物処理器を導入し、彼ら自身の世界の写真を、まるでコラーージュするかのように再構築しはじめたのだ。人は笑う動物である、というニーチェの定義が正しければ、そうすること、彼らは彼らの人間性の一部をも回復したのである。

いま私は、その写真が赤くないからこそ、バラ色であると思っている。北米アナキストの組織は、ほとんどがサンディカリストのそれであり、足の先から頭の先まで



国家はウソだらけ……世の中ウソばかり

世の中の「ウソつき」現象について、私たちはもっとよく研究する必要がある。

私たちの社会に内在し、全面的に広がっている本質として、「ウソ」の占める位置は決して小さなものではない。今こそ、それにふさわしい考察をすべき時であろう。不正直について、私たちはもっとマジメに取り組もうではないか。

ウソつきどもは、どのようにして私たちをだますのだろうか？

それを、これから解説してみよう。

詐欺の手口、特に対面での手口は、今日では非常に高

度に洗練されている。広く使われる表現を使って話をしている人々に、突然暗雲が降りかかってくる。何か言っている人々に、人は何か意味があるのだろうか？と錯覚するが、それは大間違いである。鳥笛のように反応があったとしても、本当は意味のない騒音でしかないのだ。広告宣伝、新世代の若者用語、酒場での世間話、マルクス主義の弁証法などがその好例だろう。

多くの表現が氾濫していても、うまくコミュニケーションできているとは限らない。たとえ最高にうまく言えたとしても、人は自分が思ったようにには十分に伝えられないし、最高にうまく言えることなどほとんどないのだ。ニクソンのテープにある空白部分の多くは、故意に消

されたわけではないのである。

当たり前の言葉を使ってゴマカす典型は、矛盾しているとは思えない言葉を組み合わせ、もっともらしい専門用語に変えてしまう手口に見られる。

たとえば

開放的結婚 (Open marriage)

革命政府 (Revolutionary government)

法と秩序 (Law and order)

労働の権利 (Right to work)

解放の神学 (Liberation theology)

自由学校 (Free schools)

などなどだ。

洗練された詐欺の対極にあるのは、すぐに言葉を濁すやり方である。(たとえばヤルゼルスキ將軍のやり方) タバコのように、この手のウソは包装されて出て来ることが多い。しかもタバコのような警告はない。

政治家と聖職者が典型的な見本であろう。我々には到底容認できない見本である。

ビジネスの世界(他にどんな世界があるというのだ?)

にも、まったくプロのウソつきと言っている職業がある。たとえば弁護士やセールスマンである。原子力産業や防衛産業のように、もはや普通の消費者の目をチョツとゴマカすようなレベルではなく、ビジネスの必要上、どんなでもない大ウソを人々に押しつけることを前提にしている産業さえ存在するのだ。

それでもなお、やはり政治家が最悪なウソつきの代表だろう。

私たちが税金を払って受け取る代償は、(命令の他には) ウソだけである。税金は連中が自分たちのために使ってしまうのである。

外交は、いわば正装したウソつき行為である。

「外交的」人間というのは、対立を和らげるためにウソをつくる人のことである。しかし実際の外交では、相手の政府もこちらとまったく同じように暴力を独占しているから、政府は自分の支配する国民に対してよりも、はるかに注意してウソをつかなければならない。

政治家はいまいきな言い方が得意だが、決して繊細であるわけではない。国内の武力の大半に命令できる立場にあるから、国内では微妙な差異など無視して構わない。

たとえば、「テロリズム」という言葉の公式的な使われ方には、必ずといっていいほど、典型的で根源的な大ウソが組み込まれている。この言葉は、正確には「政治的な目的のために非戦闘員に向けて暴力を使用すること」を意味する。中米で暗躍する暗殺団や、爆弾を仕込んだ玩具を空中投下して、アフガニスタンの子供たちを不具にしているソビエトの行為がいい例だろう。つまり、テロリズムとは、直接の強要ではなく、「テロ」の恐怖感を擦り込むことによって、自分の意志を押しつけることなのだ。

戦争・犯罪・暴動などとは多くの面で異なる行為を、肯定的にであれ否定的にであれ、一つの言葉で言い表すこと自体は必ずしも悪いとはいえない。だが、政治家や御用学者・御用ジャーナリズムは、まさにこの特徴を不明確にしてこの言葉を使っている。連中によれば、政治的暴力、破壊行為、あるいはほんの小競り合いでさえも、テロリストが「制服」を着てなければ、それは全て「テロリズム」になる。従って、たとえ何をしようと政府の行為はテロリズムにならないが、反国家的な実力行使は常にテロリズムなのである。たとえそれが軍隊同士の戦闘であっても、政府軍でない側が常にテロリズムなのだ。

アメリカがサルバドル人傭兵にやらせた大虐殺、イスラエルによるパレスチナ難民キャンプへの爆撃やレバノンの誘拐、カンボジアやアフガニスタンでの、あれほど殊勝ぶって嘆き悲しまれた虐殺、あるいは南アフリカの刑務所で行われている殺人でさえも、それが国家の行為である限り、それは公認された処刑であってテロではないのである。

テロリズムの定義は、暴力や殺人の問題ではないし、折り目正しい正当性の問題ともあまり関係がない。軍人は、非難されないように念入りに制服を着こんだテロリストに他ならない。

うるさい世論を眠りこませるにはそれで十分である。グレナダの精神病患者を吹っ飛ばしたり、キューバの建築労働者を射殺したりしているときに、大統領がぐっすり眠れるほど十分ではないかもしれないが。しかし実際そのとき、大統領は「いつものようによく眠ったよ」と言ったものだ。

この方法は驚くほどの大成功を収めた。

一方、サンディニスタは（後に彼らは政権を取った）ソモサに取って代わったマジックの瞬間まで彼等はテロリストと罵られ続けた。ロバート・ムガベ大統領は、ジ

Bob
Black

私のアナキズム問題

アナキズムは、私にとってずっと厄介な問題だった。私は、1970年代半ばまでに反国家主義・反資本主義の立場に立つようになったが、アナキズムはそれには無条件に役に立った。しかし、その立場になってから、私は最初に「私がアナキズムに賛同しない理由」を説明しなければならなかった。

辞書的な定義なら私はアナキストになるだろうが、辞書は知識の入口に過ぎない。同じ名前で呼び、相違に目をつぶって無理矢理統一したところで、矛盾だらけで支離滅裂であることを覆い隠すことはできないのだ。

歴史を調べれば、その意味がもっとハッキリするだろう。

「原点に帰れ」と要求する原則論者たちが、その点をよく証明している。なぜなら彼らもまた歴史から自由ではないからだ。

真の原始教会を再生できたプロテスタントの流派はいやうに、どんなアナキストの原理主義も、バクーニン主義者・クロボトキン主義者・あるいは他のいかなるモデルも、純粋なアナキズムを再現することはできなかったのである。

偉そうにアナキストの実践に入ったものは何でも、「過渡期のアナキスト現象」(phenomenon-in-process)に入らざるを得ない。それがアナキズム思想から論理的に導かれるものであるか否かにかかわらず、またそれを否



麻薬戦争は国家の健康法

(Loompanics社のカタロン増刊に掲載)

かつてランドルフ・ボーンは、「戦争状態こそが国家の健康状態である」(Resek 1964: 71)と喝破したが、これ以上スルドイ観察は、未だかつてなされたことはないだろう。

過去一千年、ヨーロッパでは戦争が国力増大の主要な原動力であった。(Tilly 1992) もちろんヨーロッパに限ったことではない。国家を拡大し、その富と権力を増大させたのは常に戦争であった。

戦争は服従を促し、異論の抑圧を正当化し、非国民をデッチあげる。

戦争は、外敵に目を向けさせて社会の緊張を緩和する。もちろん同じ理由で、敵国もまったく同じことをしてい

るわけである。

国家の立場からみると、戦争について困る点はたった一つしかない。それは、「戦争には終わりがある」ということである。「戦争が終わる」ということは、最終的に勝つか負けるかよりもはるかに困った問題なのだ。

第一次世界大戦後のオスマン・トルコ帝国やオーストリア・ハンガリー帝国のように、敗北してたまたま国家が消滅することもある。しかしいつもそうなるわけではないし、たとえばそうなったとしても、別の国家に道を譲るだけの話だ。

国家システムはただ存続するだけではない、それは隔々にまでいきわたるのだ。

戦争はたいいてい、危険を冒してもする価値がある。もちろん兵士や苦しめられる民間人にとってではなく、国家にとって危険を冒す価値があるわけである。平和なんてゼイタクは言ってられない。

戦争終了の直接的な影響は、アメリカ独立戦争後や第一次世界大戦後に起こったような景気後退や不況である。戦争に「勝って」、勝利の分け前にあずかれるだろうと無邪気に信じている人々の上にその苦難が降りかかるるとき、人々はさぞ傷つけられることだろう。戦勝の分け前にあずかれるのは国家であって、一般大衆ではない。政権は、「抑圧と犠牲強要の戦時体制」を意図的に長びかせようとする。第一次世界大戦後、合衆国が共産主義の恐怖を煽り立てたのはその例である。しかし人々は、ウォレン・ハーディングが彼らに約束したこと、つまりすぐに平時の状態に戻ることを望んでいるのだ。

敗北した側が、第二次世界大戦後に占領された日本やドイツのようにうまくやれることはまずないのももちろんである。ドイツでさえ、初めは飢饉を経験したのだ。かつて国家がほとんど常に戦争をしていた時代もあった。たとえば共和制時代のローマである。ローマの専

制者たちは、戦争が階級闘争を消滅させる安全弁であることを知っていた、とリビイ(一九六〇)は繰り返して説明している。

植民地戦争はさらに好都合だ。戦争は母国から遠く離れた所で戦われる上、敵がいかに勇敢であっても、軍事的には著しく劣る場合がほとんどだからである。

一八世紀から一九世紀の大英帝国が良い例だろう。

無慈悲で情け容赦のない英国の支配階級は、商業資本主義(産業革命によってすぐに信じられないほど膨張するが)による富をむさぼり食い、国家運営術にも長けていた。世界最強の海軍と島国という地理的要因に守られていたから、英国政府は必要とあらばいつでも戦争を始めることができたのである。砲弾のエジキを見つけるのは容易だったし、ヘッセン人のような傭兵も即座に雇用できた。昨日までの敵を屈服させ、今日から自分たちの手兵として使うこともできた。一七世紀に何度も征服されたアイルランドも傭兵の一つの供給源であった。一七四六年にはスコットランド高地人の文化と社会を壊滅させて、その生き残りから兵隊を集めて連隊を編成した。彼らはインドでもアフリカでも、どこでも、この安上がりな方法を繰り返している。

Anti-Globalization



反資本主義者の抵抗運動
——反グローバリゼーションにおけるアナキスト運動論のために——
ブラック・ブロック声明
反グローバリズム・フォト・クロニクル

反資本主義者の抵抗運動

——反グローバリゼーションにおけるアナキスト運動論のために——

noiz

日本の反グローバリゼーション行動

——ACAの闘争

2001年10月18日、首相官邸前でACA (Anti-Capitalism Action) (†)を名乗る行動グループが、小泉首相のAPEC首脳会議参加に対する緊急の抗議行動を10数名で敢行した。9・11事件以降のアメリカ国家による「報復」戦争という国家テロの遂行体制を固めるための会議に反対しての行動であったが、厳戒体制を敷いていた機動隊によって排除された。しかしACAは倦むことなく、その日の夜には東京・渋谷で、APEC「反テロ」

会議を東アジアにおけるグローバル資本主義体制を補完するものとして弾劾する情宣を行い、デモを敢行した。ACAは「グローバリゼーションを解体するまで闘うぞ」等々のシュプレヒコールをあげて戦闘的にデモを貫徹しただけでなく、渋谷の街に展開するマクドナルド、スターバックスなどの多国籍企業の店舗に対して直接抗議のコールをぶつけた。

またACAは11月17日に、カナダ・オタワで開かれるG20/IMF/世銀の会議に対する現地の抗議行動に連帯して、最終的に機動隊によって暴力的に排除されながらも、東京にあるIMFアジア太平洋事務所に対して抗議行動を行っている。

日本においては、IMF／世銀などの機関を目的意識的に直接の抗議対象とする行動はおそらくこれまでにあまりなかったと思われる。その意味ではACAなどの最近になって現れたある組織群^②の登場は、反グローバリゼーション運動の世界的な高揚に対応するものと言えるかもしれない。ウェブサイト上のテキストやビラ、機関紙などを読めば分かることだが、これらの組織は資本主義のグローバル化に明確に異議を唱え、これに反対する主張を掲げているところに共通点がある。

ではなぜこれらの組織は改めてグローバル資本主義反対・新自由主義反対を唱えて結集しているのだろうか。筆者自身が参加しているACAに限って言及するが、しかしそれはあくまで筆者個人の見解であり、ACA内の共通した認識ではありえないことを予め断っておく。ACAは個人共闘の行動体であって、統一した綱領や規約などを持たないからである。

ACAは反グローバリゼーション闘争のための結集軸である。それは様々な思想・立場を持つ人々の共闘の枠であり、協働／一致できる指標はその名が端的に示すとおり反資本主義・反グローバリゼーションである。例えば筆者のようなアナキスト的な立場に関心を持っている

人間も、その一致点を認めることができれば参加することとは可能であり、またアナキストでなくともそれは同様である。ACAウェブサイト上の「個人共闘(野合)」という表現は、分裂してしまわないための一致点だけを意識した緩い集合としての状態を指し示しているわけだ。

直載に言って、日本においては従来の左翼の運動はじり貧の状態にある。既成左翼はもとより、新左翼と呼ばれてきた既存のあらゆる左翼組織にしても従来の戦線の防衛に追われ、権力―資本の側の攻勢に対して守勢一方にあるというのが大雑把な現状の叙述としては可能だろう。あるいはかつて「過激派」と呼ばれた党派でも生き残りをかけて大衆運動や労働戦線へのシフトに重きを置きはじめている。

そうした状況にあって、広義には社会主義者とも言える雑多な傾向を持つ人々が、社会変革のための運動の底上げを望んで行動に結集しているのだ。現状においては組織の恒常的な存立や拡大とは関係ないところにACAはあるが、筆者は先のことについては分からないし、これ以上は言及できない。

その共同行動枠としてのACAがなぜ、反グローバリゼーションを唱え、あまつさえデモの最中にグローバル

資本の象徴的な店舗に対して直接抗議の声をぶつけたりするのだろうか。

後者の疑問に対しては、筆者は有り体に言って応える術を持っていない。そのことによって直接的な変革は当然期待するものでもなく、やりたいからやっているとか言い様がないからだ。理屈をこねる気はない。ただ、共感・反感・無視のいずれの反応があるにしても、あくよくば道行く人たちにアピールできさえすればいいと個人的には思っている。デモという、その参加者以外の人々にとってははた迷惑な行為に「行動によるプロパガンダ」の意味を認めても、それ以上の意味を求めるつもりはあまりないというのが正直なところである。「マクドナルドは森林を焼き払うな」「スターバックスはモノカルチャーを強制するな」などとシュプレヒコールを叩き付けるヘンテコ？なデモが面白いからやっているんだ！という気持ちさえ実はある。他のACA参加者に怒られるかもしれないけれども。

前者の疑問、なぜ反グローバリゼーションなのかということについては、ACAとしての立場から離れ、より一般的、ではなくて、アナキスト的な立場から、不十分ながら以降に展開してその参考としたい。繰り言になる

がACAの立場については筆者個人は断定できない。

反グローバリゼーションという運動

反グローバル化の闘いは今や市場自由化に対する現代の抵抗運動である。それは、多国籍資本が世界を恣にするに對する社会的な異議申し立てであり、実力行使による政治への直接参加^③を通じた変革の希求でもある。この社会運動は1990年代後半以降欧米で急速に拡大してきたものであり、そしてまたアジアやラテンアメリカの諸地域における資本のグローバル化に抵抗する闘争の当事者によって逆に再発見されつつある。

資本主義のレッセフェール^④に抵抗する闘いそのものは、言うまでもなく今にはじまったものではない。それは常に、アナキストが追求する無政府共產主義や直接民主主義、ボルシェヴィキの中央集権的な共産主義、自主管理・評議会などのオルタナティブ路線の社会主義、社会民主主義者などによる改良主義、等々の対置となつて現れてきた。あるいは、NGOの「持続可能な発展」「公正な商取引」などの修正資本主義的な要求なども存在してきた。

反グローバリズム街頭行動／フォート・クロニクル

GENOVA July.2001

ブラックブロック活動家の声明

ジェノヴァ 2001年7月21日
ブラックブロック参加者

我々はブラックブロック参加者のために強く弁護する。
我々は強者の政治へ無力なまま服従することを欲していない。我々はレッドゾーンに戦闘的に突入してG8の会議を止めるために来た。

昨日警察は抗議者に対して残忍な行動に出た。抗議者は叩きのめされ、催涙ガスと衝撃弾で攻撃されたあげくに拘束され拷問されたのだ。警察の残虐性は抗議者の一人を虐殺することによって頂点に達した。

公表された論評ではブラックブロックが暴力全体の責任を負うとされた。

資本主義者の世界秩序は日ごとに多種多様な暴力を生み出している。貧困、飢え、債務、排除、何百万もの人々の死および生活空間の破壊は、資本主義者たちの政策の一部な

のだ。

これこそがまさに我々が拒絶するものである。

銀行や多国籍企業のウィンドウを叩き割ることは象徴的な行為だ。しかしながら我々は小規模な店舗や車を破壊し略奪することには同意しない。これは我々のとるところではない。しかし我々はまた我々を分裂させたりはしない。分裂は抵抗運動を弱める常套手段だ。我々は連帯に裏打ちされた批判をこそ歓迎し、考慮する。

我々はカルロ・ジュリアーニの虐殺に怒り、そして悲しんでいる。我々の深い哀しみと憤りを抵抗に変えよう。

ウィンドウが派手な音をたてるとき、あなた方は叫ぶ。それなのに人が死んだときにはあなた方は沈黙している。

歴史は決して終わらない。革命万歳！

ジェノバG8抗議で何が起ったか？

ジェノバにおいてブラックブロックのひとつに参加した
アイルランドアナキストへのインタビュー

2001年7月21日から23日、トニー・ブレア首相が「アナキスト・トラベリング・サーカス」と呼んだ集団がG8年次総会と衝突した。

最富裕の8ヶ国のリーダー達によるトラベリング・サーカスが面子のかかった負債帳消しや世界経済の低迷に関する情勢変化をほとんどプロデュースできなかったことは記録されねばならない。1996年以来41の最も負債を抱えた国々は350億ドル以上の支払いを行った。

私はそう、ちょうど貴方が知りたいと思ったことを考えた。30万人余りのデモ参加者の一人から見てもそれがどんなことなのか。この短いスペースで私ができるのは若干の個人的な思い出と意見を提供することだけである。旅から帰ってテープルの上で寝てベッドを探しアイルランドのキャンプサイトで私はまたはじめるだろう。

アイルランドのグループは主に「抵抗グローバライズ（反グローバリゼーション組織の広範な傘下グループ）や Glaiseacht

（民主主義と非暴力直接行動の強いルーツをもつ環境グループ）によって成り立っていた。私にはとてもいい雰囲気だったし、ことが組織化される方法がとても印象深かった。大きいミーティングは毎日あった。そしてその後小さな親和的なグループに分かれた。このグループはおおよそ8つくらいだった。それぞれのグループはどの抗議に参加したいかを独自に選択した（尤もほとんどの人々は木曜日と金曜日の行進にともにさんかしたのであるが）。木曜日の行進はおおよそ午後3時に整列してそして非常にゆっくりと進んだ。この行進は移民達と団結したものだ。ベルスコーニが会議の維持のために市中からすべての「移民」（誰一人として違法ではない）を追い出したので私はこのときたち二人の移民者しか見なかった。

警察発表によれば、この日の行進は巨大で約6万人以上だった。グループによつてG8会議を粉砕するのは金曜日とされていた。G8は市の中心部で開催されていた。その全地域はすでにコンクリート土台で固められた14フィートの高い網のフェンスで非常線が張られ、およそ二万八千人の警官と準軍装

警察によって悪名高いレッドゾーンが作られていた。さまざまなグループが突入する異なった案を描いていた。Tutte Bianches(白いツナギ)やBastaグループを含むポストモダン・コミュニストはえらく水増しされた活動家とによる、非暴力的な直接行動を提案していた。レッドブロックの社会主義者達は突入するために全勢力を使うことを提案し、カラフルなピンクブロックは粗末な衣装でレッドゾーンへと踊っていくことを望んだ。何たる「戦術的浅はかさ」か。

私は悪名高いブラックブロックと一緒に整列した。アナキストやアウトノミストのブラックブロックはマスクやすね当てをつければ直接警官を引き受けることを提案した。

われわれのブラックブロックは二千人強を数え、COBASからきた他の約四千人との合流に成功した。COBASとはかつてNATOによるユーゴ空爆に抗議して10万人の強力なストライキを組織した一般庶民労働組合グループである。この巨大なそして見事に組織された集団は、不幸なことにレッドゾーンの前で別々のグループに分けられてしまった。われわれブラックブロックは最終的にレッドゾーンにたどり着くまでに4時間さまよったが、しかし突入することはなかった。そのうえわれわれは4度にわたり催涙ガスを浴びせられ、刑務所や不動産同様、銀行が攻撃された。オコーナー通りの広場を円形

にデモするために警察と交渉する無駄骨を折ったことは確かに認めねばならない。一方多くの器物破壊とりわけ車やバス停そして信号機などの破壊はばかけており、現実的にはG8に対する効果はなかった。これらのことが若くフラストレーションのたまった人々の間に起こったのもっとも組織だって地域を熟知していれば有効に警察やレッドゾーンにわれわれのエネルギーを向けることができたと思う。

カルロジュリアーニの死、拡大する警察暴力、そして破壊に包まれた街はその夜恐怖を呼び起こした。しかし朝まで怒りは続いた。明るく晴れ渡った日曜日の傷つけられたデモは巨大だった。通過するのに2時間を要した。デモの先頭では再び暴徒と化し、光った銀バエみたいな格好の警官の列に突っ込んで闘いが始まっていた。ジュリアーニの死への怒りによって、「白いツナギ」や「再建コミュニスト」、主にイタリアの他の人々と結合したアナキストたちのこの日の暴力は、前日よりずっと自然だったし直接参加的であった。

全体的にメディアは例のごとく暴力に焦点をあてた。

ジェノバにきてそして真のアナキスト理念、とりわけ直接民主主義と直接行動(暴力そして非暴力の双方)の理念を拡大した莫大な人数を私は指摘しておきたいと思う。直接行動はおあつらえ向きのものを得た。そしてカナダ首相が縮小

フォト・クロニクル Genova



ジェノバ中央で街頭闘争に走り回るさなか、暴力警官に攻撃されて防衛しようとする抗議者(7月21日開催日)における暴力的な反資本主義の不安定な動きのなかで、前日にはイタリアの抗議者が警官に撃ち殺された。(REUTERS/Sergei Karpuhin)



ジェノバ中央で警察官からの警棒の攻撃にあつた友人後方が防衛しようとしたため走り去ろうとする抗議者。(REUTERS/Sergei Karpuhin)

7月21日の暴動2日目のジェノバ中央で、焼き尽くされて車の傍ら通りすぎる際、電話連絡する警官。(REUTERS/Sergei Karpuhin)



5分 (AP Photo/Darko Bantic)

暴力警官によって進行されるため手を上げる抗議者たち。ジェノバ中央。7月21日。(REUTERS/Sergei Karpuhin)



ひっくり返されて燃える車両を背後に、二日連続してデモ隊と警察が衝突するなか投石するデモ参加者。7月21日(土)のダウンタウンで、前日の金曜日には、一人のデモ参加者(ジュリアーニ)が殺されて



グローバルizm抗議者を散らすことで、傷ついたデモ参加者を行進させる警察。(REUTERS/Sergei Karpuhin)



ジェノバ中央で負傷して意識を失いかけて横たわる抗議者と警官。



(REUTERS/Sergei Karpuhin)

Seattle November.1999

ACME「アクション」による11月30日のブラックブロックの声明 (1999年11月4日 10:48am)

これは、11月30日のシアトル行動に参加したブラックブロックの一セクションからのコミニケである。このセクションは、ブラックブロックに参加した個人が属するの諸グループであり、シアトル繁華街にある様々な大企業を標的にして攻撃した。攻撃対象は(ほんの幾つかの名前を挙げるだけだが)次のものであった。

フエリティー・インベストメント(コロンビアのU'wa部族を破滅に追いやった、オキシデンタル石油に対する主要投資企業である)

バンク・オブ・アメリカ・USバンク・キー・バンク・ワシントン相互銀行(大企業による抑圧拡大の鍵となる金融機関だ)
オールド・ネイビー、バナナ・リパブリック、GAP(フィッシャー族の商売であり、北米北西部の森林地帯と搾取工場の労働者の強姦者たちだ)
ナイキ・タウン・トリ・バイス(あまりにも高価な商品は労働

搾取工場で作られている)

マクドナルド(奴隷的賃金体制のファーストフード商人であり、熱帯雨林を牧草地帯に変えるために破壊し、動物を惨殺している。)

スターバックス(中毒物質の行人。その商品は農家が貧困どころではない低報酬で収穫したものであり、その収穫プロセスでは農家が所有している森林を破壊しなければならぬのである。)

ワナー・ブラザーズ(メディア独占企業)
プラネット・ハリウッド(惑星ハリウッドだからだ)

この活動は、5時間にわたり、店舗正面の窓ガラス・ドアを破壊し、店舗の外観を傷つけた。

パチンコ・新聞受け・大槌・木槌かなてこくぎ抜きを使い、戦術的に、大企業所有物を破壊し、内部に入り込んだ標的

にされた三ヶ所のスターバックスとナイキタウンの内一ヶ所では略奪も行われた。グラス・ウ・チングの溶解液がつまった卵・ペイントボール・スプレー・ペイントも使われた。

ブラックブロックはいくつかの親和グループと、繁華街を行き来する個人がゆるやかに組織化された集団であり、あるときは壊しやすく重要な店頭で、別なときには警察組織の目の前で形成された。

ペーパー・スプレーをかけられたり、催涙ガスを噴霧されたり、ゴム弾で撃たれたことがある活動家の大部分とは異なり、我々ブラックブロックの一部のほとんどは、一貫して動き回りつづけ、警察との接触を避けることで、重傷を負うことを回避したのだ。

我々は相棒同士であり、親密な仲間であり続け、お互いを支援しあっていた。

連邦政府のギャングとともに攻撃された人たちは、機転のきいたブラックブロック組織メンバーのおかげで逮捕されなかったのだ。

連帯感と畏敬の念を呼び覚ますほどのものであった。

〈平和警察〉

不幸にして「平和警察」の存在と持続性は非常に不愉快なものだった。少なくとも六回の別々な機会に「非暴力」活動家は、大企業所有物を標的にした個人々人を物理的に攻撃した。ナイキタウンのスーパーストアの店頭に行き、ブラックブロックを捕え、押しのけるといった行動に出るものまでいたのだ。

実際、こうした自称「平和維持者」は、ブラックブロックの個人々人に対して、国家によって保護されている、制服を着た、暴力的な、悪名高き「平和維持者」に対するよりも、もっと脅迫的姿勢を取っていたのだ。た。おとり捜査員は活動家平和維持者の保護を利用して、大企業所有物破壊行動を行っている人々を待ち伏せさせたのだ。

〈ブラックブロックに対する反応〉

ブラックブロックに対する反応は「非暴力活動家」コミュニティの矛盾の幾つかと内部抑圧を強調している。

黒服を着てマスクをかぶった人々(彼らの多くは、器物損壊などを行ったことのないという事実にも関わらず、しつこく攻撃されていたのだ)に対して暴力行為を行った人々が述べている明らかな偽善は別として、特権を持った活動家によるレイ

シズムは存在する。彼らは私的所有権という名の下で社会の大部分と自然界に対して永続的に続いている暴力を無視する余裕があるのだ。

窓ガラスを壊すことは、巨大な人形やウミガメの衣装がこれまでに行いえたもの以上に、シアトル地域にいる最も抑圧された人々の多くを引き付け、インスパイアさせている。(他の地域でこうした道具が効果的だったことをけなすわけではない。)

「ブラックブロック」に関する10個の神話

N 30のブラックブロックについて流布されている神話をここに私試しておこう。

1. 「ブラックブロックは皆「ジーン」のアナキストの仲間だ。」
「ジーン」から来たアナキストも数名いるが我々は合州国全土からももちろんシアトルからもやって来ている。いかなる場合であれ、われわれの大部分がシアトルでの地域的諸問題についてよく知っている(例えば、最も極悪非道な多国籍小売業者の幾つかが最近シアトル繁華街を占有しているということなど)について
2. 「ブラックブロックは皆「ジョン・ザ・サン」の信奉者だ。」
流布されているうわさの多くが我々が器物破損を擁

護している「ジーン」出身の無政府原始人主義著作家「ジョン・ザ・サン」の信奉者だというものだ。我々の中には「ザ・サン」の著作と分析を評価しているものもいるが、直接的にも、間接的にも、哲学的にも、何であろうと、彼は我々の指導者などではない。

3. 「大衆スクワット(Mass public squat)は、11月30日に器物破損を行ったアナキストたちの本部である。」

実際、「自律ゾーン」スクワットにいる人々のほとんどはシアトルの居住者であり、そのスクワットが11月28日に始まって以来、自分の時間の大部分をそこで過ごしている。アナキストとスクワッターはお互いに知ってはいるものの、同じ空間にいるわけではなく、いかなる場合であれ、スクワットが器物破損行為を行った人々の本部だとみなすことなどできない。

4. 『ブラックブロックが11月30日の状況をエスカレートさせ、無抵抗で非暴力的な抗議参加者達が催涙ガスをあびる結果となった。』

このことに回答するためには次のことを指摘するだけで良いだろう。催涙ガス・ pepper spray・ゴム弾での射撃は全くもって(我々が知る限り)ブラックブロックが器物破損行動を行う前にはじめられたのだ。さらに言えば、我々は

フォト・クロニクル Seattle



セキュリティのガードをくぐり、横断幕を広げてプレス・センターで叫び始めた抗議者が世界貿易機関(WTO)会議の外側へシアトル警察によって排除される——金曜日、4日間135ヶ国の代表と一緒のセッション以後、会議は金曜日に終わることにな

シアトル中心部キング郡刑務所前で1ドルの紙幣を燃やす抗議者——木曜日。数千の抗議者は、世界貿易機関(WTO)会議と2日間の暴動における500人以上の逮捕と勾留に対し、平和的に通りを行進し、刑務所で解散した。(Robert Sobbo/ロイター) (12月3日金曜日——午後2時28分 ET)



つた。火、水曜日にシアトルの中心部で起きた広範囲にわたる暴動は静まり、会議場の近くの店が営業を再開。警察は、会議場周辺のセキュリティ地帯を、終会まで維持する。(Anthony Bolante/ロイター)



芸術と革靴とチームの踊り by bill stender 4:30 pm 99年12月1日水曜日 おかいい!



反世界貿易機関(WTO)デモ参加者を押し戻すシアトル警察。シアトル中心部で、1999年12月1日水曜日、市役所職員は、都市中心部近隣全域で非抗議地帯を宣言。孤立したデモ参加者たちをバラバラにし、彼らを逮捕することを許した。水曜日(午後2時30分 ET)彼と彼のパートナーが世界貿易機関会議に抗議する女性を逮捕するので、警官は大群衆からゴム弾で自身の退却を守る。12月1日水曜日。シアトル中心部で。警察は、世界貿易機関(WTO)が会議を開いている都心の近くで、全ての抗議者を取り締まった。12月1日水曜日午後2時30分



(AP Photo/John Gaps)

本クロニクル記事はインフォショップに掲載されたものを抄記したものである。

切断と連結

アア 夢ノイツサイノ後退スル中ニ トホク烽火ノアガル
 嬰兒ノ天ニアガル
 タダヨフ 無限ノ反抗ノ中ニ

——逸見猶吉

松本 勲

出来事と時系列

出来事の一連の流れというものは確かにある。一九七五年五月二九日、東アジア反日武装戦線の三部隊は逮捕された。そして、その後に赤軍は二度にわたり戦線メンバーの奪還闘争を行った。この二つの出来事は確かに事件としての連続性を表明しているし、明らかに〈前〉とその〈後〉の関係として存在している。一九七五年五月

の逮捕、同年八月クアラルンプール、そして七七年九月ダッカ、それらの前後関係は、日本国家権力に対する決定的な要素を闘争に付け加えた。赤軍は奪還闘争の衝撃とともに、力による力の移動を明らかに宣言し、政治的な法制度の一角に超法規という名の空洞を穿つことで権力の整合性を突き崩すことに成功した。浅間山莊銃撃戦がいかにあしざまに言われようとも、この山岳戦が決して「犯罪」ではなく、ある力と力の相対的対決以外ではないということを公然と叩きのめすように示したことも

に、この奪還闘争は「アラブ」赤軍が最後まで誇りうべき事柄である。やがて時間的に刻印されたこれらの出来事は、今度は日本国家権力からの整合性の回収への絶えまない執念によって、再逮捕という新たな連鎖として継続することになる。これらの奪還と再逮捕はあたかも時計が一刻一刻を刻むようにして正確に記述することができる。

八七年十一月丸岡さん逮捕、八八年六月泉水さん逮捕、九五年浴田さん逮捕、そして昨年の重信さん逮捕。この逮捕劇はもちろん日本国家の行動により一方的に引き起こされた〈事件〉そのものであり、これらの事件の網目の奥のほうに、船本や磯江、そして宇賀神、加藤、大森冤罪事件らの各氏のさまざまな〈事件〉が織り込まれている。後景に佐々木規夫さんや大道寺あや子さん達が佇んでいるのはいうまでもない。（以下敬称を略す）

ところで、これらの時系列が表している肝心の意味系列のほうはどうだろうか。日常的時間感覚によって区切られた出来事の一連の連鎖は、いわば通俗的時間概念のもとに、前のものが後のものを導くというふうな、一定の意味を強引に付与していく。あたかも東アジア反日武装戦線の闘いが、敵手である日本国家の行動によってひ

きおこされた対赤軍問題に飲みこまれていくように、一定の終末的な意味を繰返しに喧伝によって付与されていくのである。もちろんこれは、作り上げられた〈事件〉と時間的錯覚、そして政治的な強固な意志によって図られる「トリック」以外のものではない。

私達は、これに類似した「トリック」を何度も見ている。メディアと権力が一体となつてこの大演壇の筋書きを演出するのだ。

かつて連合赤軍「事件」が明らかになったとき、日本国家の意向をうけたメディアはこぞとばかり「新左翼運動の終末」を喧伝した。「凄惨な同志殺し」というトピックスはおあつらえ向きの題材を提供するとともに、「一部過激派連中」の末路というワイドショーなみに「事件の連鎖」を騒がてたのだ。ご多分にもれず良心的左翼知識人達は、出来事の通俗的な前後関係を、繰り返される報道のレトリックによって意味の系列として脳髓に叩き込まれ、目を伏せた。それ以降、左翼共産主義者達はこの〈事件〉をもって社会革命運動の「必然的結末」として「挫折」なるものを口走り、逃走を謳歌したのだった。

だが、当たり前のことだが、無内容な市民的ヒューマ

ニズムを連呼することでこの手の「必然的帰結」をしゃにむに導こうとする論理がおかしいことはすぐわかる。なぜ「連赤」の結末が社会革命運動の総体を象徴し、そこに至らざるをえないと考えられるのか。なぜ膨大な数の全共闘運動から始まる反乱が一点に象徴化され、あらゆる変革意志の膨大な裾野を捨象して極点化されうるのか。それを行っているのは誰か。闘争当事者でないことは確かだ。はっきりいえば、メディア好みの華々しい数々のスキャンダラスな事件にもかかわらず、共産同赤軍派は前段階武装蜂起という実態を伴うことのない「建党」建軍の路線を観念的に採用したひとつの潮流でしかなかったし、旧アラブ赤軍がどのように国内「旧」赤軍との異質性をさまざまなパースナリティーから表現しようとも国際根拠地論の呪縛のなかで存在してきたとしかいうことはできない。だが、その戦略は何よりも民衆の反乱的「構想力」或いは「想像力」の驚くべき勃興という大前提なくしては、選択の余地の全くない戦略であったことは明らかである。これは後に論及する東アジア日武装戦線について、あるいはまた弱体化したアナキスト革命派グループについてもいえるのだが、正直言えばどれもが反乱の根拠を当たり前のこととして、つまり膨大

な数の未分化な反乱的「構想力」が現実存在することを前提にして、「いかに」敵を打倒するかという「ノウハウ」問題にすべてを集中させていたのだ。それゆえ、それらの反乱の原基がなんなのかという問題を抜きにして、ほとんどの内部論争は「力」をめぐる競合的な技術論に集約された。すべてがごたごたになったまま事件は連続する

そして、出来事の無内容な時系列的羅列は、いつか事件が内容を飲みこむことによって意味の連続性を切断したまま、あるいは切断された意味を無媒介に連続化することで、ある政治的な意味をデッチあげる。都市反乱の衰退、新左翼運動の低迷、爆弾闘争の頻発、逮捕、逮捕、そして逮捕。私達の脳髓の底の底まで汚染している通俗的時間の思考は、いつか太陽の進行が単位時計の一位の根拠であるに過ぎないことを疑うべくもなく、かつて・と・いまを意味の進行と取り違えさせ、常にいまが過去から引き出された進展或いは衰退と、つまりは帰結と錯覚させる。

同じようなことは一九八九年についても言うことができる。確かに「ソヴェト」連邦は崩壊した。公式の歴史

アナキズム Vol.1

発行：2001年12月25日

編集発行：『アナキズム』誌編集委員会

東京都千代田区神田神保町2丁目48 協栄ビル2F

TEL.03-3262-0306

Email:anarchism@sanpal.co.jp

郵便振替：00100-4-86403 「A編集委員会」

発売：株式会社ばる出版

東京都新宿区本塩町8番地

TEL.03-3353-2835 FAX.03-3353-2887

ANARCHISM Vol.1

Contents

Introduction to a new anarchist magazine

<Special Issue: Two Streams of Modern Anarchism in North America>

[Murray Bookchin]

An Introduction: Quitting to be an anarchist by Bakuto Morikawa

Social Anarchism or Lifestyle Anarchism: Unbridgeable Chasm by Murray
Bookchin (1995)

Municipalization: Community Ownership of Economy by Murray Bookchin (1986)

[Bob Black]

An Introduction: Murray Bookchin and Bob Black by Ryo Asuka

Abolition of Work by Bob Black (1985)

Anarchy After Leftism (Chapter 11) by Bob Black (1997)

My Anarchism Problem by Bob Black (1994)

Lying In State - And Elsewhere by Bob Black (1982/1985)

The War On Drugs As The Health Of The State by Bob Black (1993)

<Anti-Globalization>

Photo Chronicle and Essays on Anti-Globalist Direct Action

Essay;Anti-Capitalist Resistance: Anarchist Movements in Anti-Globalization by noiz

[Genova]

Genova Photo Chronicle

Statement by Black Block activists Genoa, July 21st 2001,
by participants of the Black Block

What happened at the G8 protests in Genoa
- an Irish anarchist reports from the Black Block

[Seattle]

Seattle N30 Photo Chronicle

N30 Black Bloc Communique by ACME Collective

Separation and Connection: On Eastern Asia Anti-Japan Armed Front by Isao Matsumoto

25.12.2001

Editing: Commity of Publishing "Anarchism"
kyouei bld.2F, 2-48 kada-jinboucho,
chiyoda-ku Tokyo, Japan.
Tel;81-(0)3-3202-0306
Email;anarchism@sanpa1.co.jp

Management: Pale Syuttupan,
8 Motojiocy, Sinjyuku-ku, Tokuo, Japan
Tel.81-(0)3-3353-2835, Fax.81-(0)3-3353-2887